



ジブチ沿岸警備隊
Djibouti Coast Guard

ワイス・ボゴール隊長

新たな組織で 海上保安に取り組む

ジ ブチ沖の紅海とアデン湾は、ヨーロッパとアフリカ、アジアを結ぶ海上交通の要所ですが、海賊行為が筆頭に、海上での犯罪が多発しています。

そこでジブチ政府は2010年、海上保安を担う新たな組織、ジブチ沿岸警備隊(DCG)を創設しました。私は22年間勤めた海軍からDCGに移り、海賊行為や密入国、密漁、密輸の取り締まり、海難救助、海の環境保全など、多岐にわたる活動を展開しています。密漁対策では、この2年間で50以上の漁船と200人以上の乗組員を取り締まりました。ジブチは世界中の船が集まる国際港。自国の経済発展のためにも、すべての船が安全に出入港できるよう、昼夜問わず、徹底的に警備することが使命だと考えています。

日本は私たちの組織を創設時から支えてくれています。海上保安の体制づくりや技術強化など、JICA専門家から学ぶべき点は多い。また、これまで複数のDCG職員がJICA九州の研修に参加していますが、日々の業務に必要な技術の習得に大変役立っています。今後も世界の海を守る“パートナー”として、日本とは連携を強化していきたいと考えています。



沿岸のパトロールに活躍するDCGの巡視艇



タンザニア海洋庁
Surface and Marine Transport
Regulatory Authority

ケン・チムウェジヨさん

実践的な技術を 現場に生かす

東 アフリカに位置するタンザニアは、インド洋に面しています。近年海賊が多発しているソマリア沖・アデン湾にも近いため、海上保安には長年力を入れてきました。私はかつて商船の乗組員をしていましたが、海の安全を守りたいという思い

が強まり、次のステップとして、タンザニア海洋庁での仕事を選びました。現在は主席航海士として、海賊の取り締まりと海難救助を担当しています。

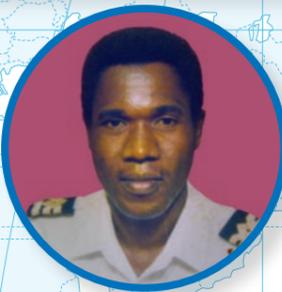
我々の警備活動の成果もあり、周辺海域での海賊行為は減少しています。でも最終的な目標は、その数を“ゼロ”にすること。さらなる取り組みの強化が必要です。そこで昨年、自分の能力を磨きたいと思いJICA九州の研修に参加。日本の海上保安官からみっちり講義や実習を受けられたのは、私にとって最高の学びの機会でした。

中でも海上保安庁の巡視船「いず」での乗船研修は、日々の業務に直結するもの。昨年タンザニアに導入されたばかりの自動船舶識別装置(AIS)の使い方、船で火災が起こった時に使用する機材の装着方法、人命を救うための心肺蘇生法など、海上保安分野の

救助活動に役立つ技術を学びました。この経験を生かし、今後も海の安全・安心を守るため、組織が一体となり、より一層業務に励んでいきます。



日本の研修で、火災発生時に空気呼吸器を装着する訓練に参加したチムウェジヨさん(右から3人目)



インド沿岸警備隊
Indian Coast Guard

プラディープ・クシャワハさん

他の組織との 連携強化を進める

イ ンド軍で働いていた父の影響で、子どものころから国を守る仕事に携わりたと思っていました。そこで選んだのが、海洋国家としてのインドを支える沿岸警備隊。これまで19年間、商船や漁船が安全に航行し、インドの経済活動が円滑に進むよう、仲間たちと協力し合いながら取り組みを進めてきました。

現在は、インド洋や近隣のソマリア沖・アデン湾での海賊行為の取り締まりを強化しています。スリランカとも連携しながら周辺海域でのパトロールを進めることで、その件数を大幅に減らすことに成功しましたが、まだ十分とは言えません。

そこで、日本の海上保安のノウハウを学ぶため、昨年JICA



実際に自分たちの指紋を採取しながら技術を学ぶ(中央)

九州の研修に参加しました。特に勉強になったのが鑑識技術の実習です。インドでは海上で犯罪が起こっても、警察が後から指紋を採取しているのが現状。しかし不審船の調査に警察が同行することはほとんどないため、その場で証拠を押さえることができず、解決に時間がかかっています。今回の研修を通じて日本の海上保安庁のように、我々も鑑識技術を身に付けた方が効率的だと実感しました。今後は日本で学んだノウハウを、インド沿岸警備隊はもちろん、警察など他の組織とも共有し、連携を強化していきたいと考えています。

特集 海上保安
世界の海を守る



海猿に聞く! 世界の海はこう守る

海に国境
世界の海を守るため、日々、
JICAと日本の海上保安庁とも連携を

はない—。
汗を流す海上保安官がいる。
進める各国の“海猿”の思いを聞いた。